

大学で「国際経済学」の講義を受けたことがある人は、リカード・モデルやヘクシャー・オリン・モデルといった伝統的貿易理論を学んだことだろう。前者では国による生産技術の違いが、後者では資本や労働などの生産要素の賦存（ふそん）の違いが貿易の源泉となることを示している。さらに、クルーグマンらが1970～80年代に始めた新貿易理論についても学んだかもしれない。ここでは、規模の経済性と製品差別化に注目し、先進国間の似た

## 貿易理論の新展開

い理論が登場し、貿易理論に大きな変革をもたらした。この理論を代表するメリッツ・モデルについて簡単に紹介しよう。

90年代に企業レベルのデータが利用可能になると、同一産業内で輸出を行ってある企業はきわめて少数であり、輸出企業は非輸出企業と比べて規模が大きく、生産性も高いことなどが明らかとなった。世界貿易機関（WTO）の報告書によれば、製造業において、米国では18%（2002年）、日本では20%（2000年）の企業しか輸出を行っていない。しかし、伝統的貿易理論や新貿易理論では、各産業内の企業の生産性は同じであると仮定されている。

こうした仮定の下で、生産性が低い企業は、生産にかかる固定費用をカバーできないので、市場から退出してしまう。生産性が中間ぐらいの企業は、生産のための固定費用を賄えても輸出にかかる固定費用を賄えないため、国内市場にだけ供給する。生産性が高い企業は、輸出のための固定費用もカバーできるので、国内市場と海外市場（輸出）に供給する。よって、現実をうまく説明できるモデルとなる。

# 貿易自由化が 生産性を高める

よような製品同士の産業内貿易を説明している。

21世紀に入ると、「新々貿易理論」と呼ばれる新し



名古屋立大学大学院  
経済学研究科教授  
川端 康

ので、こうした事実を説明することができなかった。

「生産性の高い少数の企業だけが輸出を行う」という事実を説明するために、メリッツは新しい理論モデルを構築した。メリッツ・モデルでは、企業の実効生産性は異なることされ、参入費用（研究開発など）を支払った後に自社の生産性がわかると想定されている。また、生産だけでなく輸出にも大きな固定費用（海外市場での流通網の整備など）がかかる。

貿易自由化の結果、産業内において生産性の低い企業から高い企業への生産要素の再配分が起こり、産業の平均生産性が上昇することになる。この産業内調整を通じて生産性向上効果については、米国と自由貿易協定を締結したカナダのケースなどで確認されている。

かわばた やすし 国際貿易論。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。1969年生まれ。

